

酒井隆志氏 博士論文審査要旨

論文の主題と構成

酒井隆志（さかい・たかし）氏から提出された博士論文のタイトルは、「台湾ハイテク企業におけるリスク対応に関する研究 液晶ディスプレイ産業を中心に」である。論文の構成を述べると、次のごとくである。

- 第1章 本研究の目的と位置づけ
 - 第2章 経済理論とハイテク企業のリスク対応
 - 第3章 台湾の経済発展とハイテク企業
 - 第4章 液晶ディスプレイ産業と台湾ハイテク企業
 - 第5章 ハイテク企業を取り巻く様々なリスク
 - 第6章 台湾ハイテク企業のリスク対応
 - 第7章 リスク対応をめぐる日台比較
 - 第8章 本研究の総括と今後の課題
- 参考文献リスト

論文の概要

酒井隆志氏による本博士論文は、台湾ハイテク企業を取り上げて、同企業のリスク対応方式の一般性と特殊性について、理論的・実証的な分析を行なうことを目的としている。その際とくに、液晶ディスプレイ産業を中心とした分析を綿密に行うことを主題としている。

現代の世界経済を見ると、ハイテク産業におけるテクノロジーの進歩はまことに著しいものがあり、同産業内の各企業は国境を越えて、そのシェアの維持・拡大に日夜凌ぎをけずっている。台湾のハイテク企業が世界に伍して、とくに日本や中国との競合関係において、これまで相当程度の成功をおさめてきたことは、特筆すべき事柄といえよう。ここより、台湾ハイテク企業の「成功」要因のひとつは、同企業の「リスク対応の仕方」にあるのではないかと、という推測が成り立つ。そのことはまた、同企業の一層の展開への「限界」を示すかもしれない、という推測もまた成立する。本論文は、これらの推測を単なる推測に終わらさずに、学術的なリスク経済学の観点から、出来るだけ体系的な分析を行なおうと意図している。

以下においては、本論文の概要を各章ごとに、詳細に述べることにする。

第 1 章においては、上述した目的意識の下に、本研究の狙い、背景および位置づけがコンパクトに述べられている。ここで、1990 年代を境目に、日本の半導体産業が世界一の座から落ち、その代わりに台湾のシェアが急成長してきた事実が、端的に述べられている。こうした「主役」の座の変化は、一体どういう要因に基づくものだろうか。著者はここで、台湾ハイテク企業の「リスク対応の積極性」にあるのではないかと、独自の問題提起をする。第 2 章以下の目的は、こうした著者なりの問題提起を理論的かつ実証的に裏付ける検証作業を行なうことである。

第 2 章においては、リスク対応の積極性に注目した著名な経済学者として、フランク・ナイト、シュンペーターおよび J. M. ケインズの学説が詳しく比較検討されている。とりわけ、フランク・ナイトの「真の不確実性に挑戦する企業家の役割」、シュンペーターの「市場経済の推進力としての新機軸・イノベーション」、ケインズの「単なる確率計算を超えたアニマル・スピリッツの存在」などが、本研究との絡みで順次取り上げられている。

第 3 章以下においては、第 2 章で述べた経済学説が比較的によく妥当するケースとして、台湾のハイテク企業・産業が中心的に取り上げられ、その諸々の特徴が著者なりに実証的に分析されている。まず、第 3 章は、いわば導入部分であり、台湾の経済発展とハイテク企業の特徴が一般的に分析されている。次の第 4 章では、台湾の液晶ディスプレイ産業に焦点を当てて、その際立った特性が日本のケースと比較しつつ分析されている。第 5 章においては、ハイテク企業を取り巻く色々なリスクについて、具体的に網羅的に論じられている。

第 6 章と第 7 章とは、評者の見るところ、本研究の中核部分を形成している。第 6 章では、台湾ハイテク産業のリスク対応が詳細に分析されている。著者によれば、ハイテク産業分野に特有の多種多様の「レベルの高い不確実性」に対して、迅速かつ的確に対応することが、ハイテク産業分野における企業にとって非常に有効な対策である。第 6 章では、とくにこのことが台湾企業の投資・災害リスク対応の場合に妥当することを、著者は期待効用理論やゲーム理論の援用を通じて論証することを試みている。

第 7 章では、リスク対応をめぐる台湾企業と日本企業との比較分析を企てている。さらに、台湾と日本の労働者サイドにおけるリスク対応の比較分析も行なっている。そして、台湾のケースが「ハイリスク対応」であるのに対して、日本のケースは「ローリスク対応」である、という著者なりの結論を下している。

第 8 章は本論文の終章であり、以上の研究結果の総括と今後の課題がのべられている。そして、そのあとで、参考文献リストが付けられている。

論文の評価

本論文の評価は、上述した本論文の概要からおのずから明らかであるように思われる。そこで以下では、本論文の学術的貢献および将来に残された課題とを同時に列挙し、そのあとで総合的評価を下しておきたいと思量する。

- (1) 著者は本論文の中で、台湾ハイテク企業におけるリスク対応について興味ある分析を行なっている。従来の台湾経済の研究は、後発利益論、雁行発展論など、いわゆる「開発経済論」の立場からのものがほとんどであった。それに対して、著者が「リスク経済学」という新しい視点から台湾産業・企業のワーキングとパフォーマンスの分析を試みたことは、十分評価されてよいと思う。
- (2) さらに、経済理論とハイテク企業のリスク対応との関係をそれなりに纏め上げ、本論文の「学術的深み」を付加することを企てているのは興味深い。
- (3) しかし、本論文には限界があり、将来への課題も残っていることも指摘しなければならない。とくに、台湾ハイテク企業の「ハイリスク対応」に関しては、その時間的・歴史的的特殊性がもっと考慮されるべきであったように思われる。「ハイリスク対応」には、いわば「光」と「影」の二つの部分があるので、これらの両面がもっとバランスよく論じられていたならば、本論文の価値がもっと上がったであろうと推測される。
- (4) 以上すべての点を総合的に勘案すれば、本論文の有する「プラスの価値」は、その「マイナスの価値」を相当に上回るであろうと信じるものである。

結 論

以上の論文概要と評価に見られるように、酒井隆志氏は博士論文「台湾ハイテク企業におけるリスク対応に関する研究 液晶ディスプレイ産業を中心に」において、リスク経済学という新しい観点から台湾産業・企業の特徴を捉え直し、先行研究にない独自の分析結果を提供することに成功している。

結論として、本審査委員会は、以上の諸点をすべて考慮した結果、本博士論文が滋賀大学大学院経済経営リスク専攻の博士号取得に相応しい業績であることを認めるものである。